



TITLE:

唐代前期における蕃將の形態と北 衙禁軍の推移

AUTHOR(S):

林, 美希

CITATION:

林, 美希. 唐代前期における蕃將の形態と北衙禁軍の推移. 東洋史研究
2017, 75(4): 712-744

ISSUE DATE:

2017-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/250725>

RIGHT:

唐代前期における蕃將の形態と北衙禁軍の推移

林 美 希

はじめに

一 蕃將の原初的形態と北衙との関わり

1 唐代前期の北衙の展開

2 蕃將と南衙武官職

3 太宗期の蕃將のありかた

二 北衙蕃將の盛衰と變貌

1 高宗期における蕃將の繼承と變容

2 對北方情勢と蕃將の質的變化

3 玄宗期の蕃將と節度使

三 北衙禁軍の段階的發展と蕃將の動向
おわりに

はじめに

中國歴代の王朝の中でも、唐といえば、シルクロード傳來のエキゾティックな文化に代表される、國際色豊かな時代としての側面がよく知られている。こうした特色は、唐が西方・北方に版圖を擴大し、羈縻政策によって周邊の異民族を取

り込んで、緩やかな帝國的支配體制を作り上げたことと不可分の關係にあったといつてよい。そして忘れてはならないのは、〈帝國〉としての唐を支えたのは強大な軍事力であった、という點であろう。

唐の多民族性は、文化面のみならず軍事面にも大きな要素として作用した。それは、しばしば史料に見える「蕃將」や「蕃兵」の存在からも裏づけられ、この蕃將という形態の盛行が、當該期の兵制の大きな特徴として捉えられるのである。本稿でいう蕃將とは、非漢族出身で、唐の建國以後に中國に歸屬し、將軍等の高位武官に就任した者を指す。^①

従來、唐が内包した異民族の軍事力に關しては、二つの方向から研究が進められてきた。一つは、その中心たる蕃將に主眼を据える研究で、蕃將の類型や時系列的推移を分析した陳寅恪、谷口哲也、伊瀬仙太郎、馬馳、章群の各氏があげられる。陳寅恪氏は、太宗期の蕃將（部落酋長）と玄宗期の蕃將（塞族胡人）の性格の相違を、府兵制の成熟という内的要因と東突厥・默啜可汗の支配體制の崩壊という外的要因の複合的な結果と結論づけた〔陳二〇〇一〕。この説を承けて谷口哲也氏は、唐代前期に起用された蕃將を「部族長タイプ」と「個人武將タイプ」に分類し、對北方情勢が悪化した儀鳳年間を境に、前者が後者へと順次移行するとした〔谷口一九七八〕。また、伊瀬仙太郎氏は、唐における塞外系内徙民の軍事的な役割として、外族出身の王侯による宮城宿衛や、征戰時に羈縻州民が兵として利用されたことをあげ、彼らの傭兵の性格に注目した〔伊瀬一九六四—一九六七、一九七九〕。

唐の前半期に焦點を當てるこれらの諸論考に對して、章群氏は、府兵制の崩壊後に一舉に存在感を増す後半期の蕃將へも考察の範圍を廣げ、蕃將を邊族蕃と西域胡とに二分したうえで、①參與戰爭者、②軍中推立或藩鎮世襲、③羈縻州府刺史・都督、④國王或首領來朝・來降、⑤入爲宿衛者、⑥放還蕃者、⑦その他、のように類別した。氏は配下出身部族を率いない蕃將（客將）に注目し、唐代における蕃將・蕃兵の推移を、部落首領が自部落を統率する形態から、各地の軍が諸部落から徵兵して彼らを掌握する形態へ移行したと述べる〔章一九八六・一九九〇〕。また馬馳氏は、唐の蕃將を①入朝蕃將、②在蕃蕃將、③總合型蕃將（①・②雙方の性格を有す）と三分類し、彼らの推移を②から①への轉化と捉え

た「馬二〇一」。

右の論考に共通するのは、蕃將の登場する状況や脈絡に對する十分な吟味なしに、事例収集によつて彼らの實像を把握しようとする姿勢である。その結果、蕃將の包括範圍や分類については、さまざまな理解が竝立したまま現在に至っている。しかしながら、蕃將とは、特定の條件に合致した個人というよりはむしろ、この時代特有の現象なのであり、彼らの活動を單線的に追うのみでは表層的な理解に終始せざるをえない。

一方、異民族の及ぼす軍事的影響に注目するもう一つの動向としては、唐をユーラシア史の觀點から捉え直す中で、テュルクやソグドなど特定の民族・國家と唐との關係を分析する研究がある。この視角からの考察は、近年、森部豊・山下將司の兩氏によつて成果があげられている。森部豊氏は、ソグド人集團の軍人としての活躍に着目し、突厥から文化的・血緣的影響を受けた突厥化ソグド人（ソグド系突厥）の存在形態を明らかにした「森部二〇一〇」²。山下將司氏は、唐前期の征討軍にテュルク人蕃兵が果たした役割を強調し、唐初から唐末に至るまで、ほぼ一貫して部落形態を維持しながら唐の軍事力に編成されたテュルク系遊牧民のありかたを浮き彫りにしている「山下二〇一一・二〇一四」。

さて、一聯の研究をこのように整理してみると、従前の視座からでは解けない問題が残されていることに氣づく。それはかつて「石見一九九八c」が指摘したように、邊境情勢の變化が宮廷の政治運営にどのように波及するのか、蕃兵を率いて戰場に赴く非漢族將軍と、宮廷で宿衛する異民族武官の相違をどのように捉えるのか等々の、唐王朝の國家システムと異民族の軍事力との關係性をめぐる問題である。このような課題が既に表出しているながら、解決の糸口がまだに示されないのは、異民族の軍事力を唐のそれに包攝するための制度的構造と、異民族軍の中核をなす蕃將の唐の兵制内での位置づけが、ほとんど解明されていないからではあるまいか。

筆者はこれまで、唐の北衙禁軍（北衙）の發展と唐代前期の宮廷政變との關係の分析に取り組んできた。北衙とは、唐都である長安・洛陽の宮城北門（玄武門）の北方に駐屯する、皇帝親衛軍の總稱である。唐の兵制に關しては、長らく、

國家正規軍「南衙」の運用體系である「府兵制」にばかり研究が集中し、皇帝近衛兵「北衙」の存在は等閑視されてきた。ところが今、あらためて北衙という組織やその性格を分析してみると、ここに一定数の蕃將の所屬が認められ、蕃將が北衙の一翼を擔う存在として浮かび上がってくるのである。

そこで本稿では、北衙という視角から蕃將のありかたに切り込み、蕃將と北衙との關係を掘り下げることで、唐の多民族複合國家としての體制はいかなるシステムによって支えられていたのか、という問題に迫ってみたい。

一 蕃將の原初的形態と北衙との關わり

1 唐代前期の北衙の展開

まずは、本稿で扱う蕃將たちが深く關わる北衙という軍事組織について概観しておこう。唐代前期の北衙とは、第二代太宗の貞觀十二年（六三八）新設の左右屯營に始まり、第三代高宗の龍朔二年（六六二）に左右羽林軍と改稱される「羽林軍」と、左右屯營所屬の兵士・飛騎から選拔され、百騎（太宗・貞觀十二年）、千騎（武則天・永昌元年「六八九」）、左右萬騎（中宗・景龍元年「七〇七」）と人員を擴大して、玄宗の開元二十六年（七三八）に左右龍武軍に昇格する「龍武軍」の合計四軍で構成される（表1）「北衙」の列參照）。左右羽林軍と左右龍武軍とは、いずれも同じく皇帝の親衛兵ではあるが、『通典』卷二八、職官典一〇に、

大唐の貞觀十二年（六三八）、玄武門に於いて左右屯營を置き、諸衛の將軍を以て之を領せしめ、其の兵を名づけて飛騎と曰う。又飛騎の中より才力の驍捷にして射を善くする者を簡び、號して百騎と爲し、遊幸に扈從すれば則ち五色の袍を衣て六閑の馬に乗り、猛獸の衣韉を賜わる⁽³⁾。

とあるように、發祥の時点から職掌に差異があり、宮城北邊の防禦に任務の力點を置く宿衛兵系統（左右羽林軍）と、皇

表 1 唐代前期における北衛の發展と蕃將の變遷

年 代		宮 廷 政 變	北 衛		蕃將をめぐる 對外情勢
			左右羽林軍 (宿衛兵)	左右龍武軍 (護衛兵)	
高祖	武德 9 (626)	(A) 玄武門の變			<div>突厥第一可汗國 の崩壊</div> <div>第Ⅰ期</div> <div>突厥第二可汗國 の成立</div> <div>第Ⅱ期</div> <div>默啜可汗死去 六胡州の亂</div> <div>第Ⅲ期</div> <div>ウイグルの擡頭</div> <div>安史の亂</div>
太宗	貞觀 4 (630)		北衛七營	(舊) 百騎	
	貞觀 12 (638)		左右屯營	(新) 百騎	
高宗	龍朔 2 (662)		左右羽林軍		
	儀鳳 (676-679)				
	永淳 1 (682)				
武則天	嗣聖 1 (684)	(B) 中宗廢位の變		千騎	
	永昌 1 (689)		大將軍職設置		
	天授 2 (691)				
	神龍 1 (705)	(C) 誅張易之兄弟の變			
中宗	景龍 1 (707)	(D) 李重俊の亂		左右萬騎	
	唐隆 1 (710)	(E) 誅韋后一派の變			
睿宗	景雲 2 (711)		北門四軍成立	將軍職設置	
	先天 2 (713)	(F) 誅太平公主一派の變			
玄宗	開元 4 (716)				
	開元 9 (721)				
	開元 26 (738)			左右龍武軍	
	開元 29 (741)				
	天寶 14 (755)				

帝行幸の際に身邊警護を擔當する護衛兵系統（左右龍武軍）のように區別されていた。^④

また、北衛は宮廷政變と密接に關聯しながら發展した。唐代前期には【表1】の（A）玄武門の變（F）誅太平公主一派の變のごとく、皇位繼承をめぐる政變が六度起こったが、政變（A）以外の五度の政變に際して北衛は實動部隊として出動を重ね、そしてそのことが、政變を経るごとに北衛が擴大するという連鎖を生んだ。さらに注目すべきは、北衛の伸長と護衛兵系統（のちの龍武軍）の發展とが軌を一にしていたことである。そのため、政變の勝敗は、北衛の母體である宿衛兵系統（羽林軍）とそこから分化した護衛兵系統とが

北衙内部で競合し、そのパワーバランスの變動によって決定づけられたのである〔林二〇一・二〇一二〕。さらに、北衙は騎兵を主力とする軍團であつたために、體制の擴大に伴う兵士の増員は、保有する軍馬の頭数の増加に直結した。したがって、北衙體制の發展と北衙に軍用馬を供給する皇帝牧場「閑廐」の整備も、正比例の關係にあつたと考えられる〔林二〇一・三〕。

すなわち、唐代前期の北衙は、①宿衛兵系統の左右羽林軍と護衛兵系統の百騎・千騎・左右萬騎部隊の二つの系統からなり、②このうち護衛兵系統が羽林軍を徐々に凌駕して左右龍武軍として確立する、という展開で捉えることができる。これらは、皇帝の私的な側近兵として發足した小騎馬部隊が、宮廷政治と聯動しながら勢力を擴大し、南衙に比肩する一つの軍事システムとして確立するまでの過程なのである。

では、このような北衙のありかたは、蕃將とどのように關係したのであろうか。

2 蕃將と南衙武官職

唐代前期の蕃將のありかたを、唐を取り巻く國際情勢の變化と、唐の領域内に流入した異民族の増減を基準に見た場合、おおよそ次の三期間に區分することができる〔表1〕「蕃將をめぐる對外情勢」の列參照。なお、唐の創業から突厥第一可汗國の崩壊まで（武徳元年〔六一八〕～貞觀四年〔六三〇〕）の、高祖期と太宗初期にまたがる約一〇年間は、唐の國內統一戦争と突厥との抗爭期であり、唐の蕃將は、實質的には貞觀四年（六三〇）の第一可汗國滅亡後に登場するので、本稿では、便宜的にこの期間の後から年代を區分する。

第一の期間は、突厥第一可汗國の崩壊から突厥第二可汗國の成立まで（貞觀四年〔六三〇〕～永淳元年〔六八二〕）の約五〇年間で、ほぼ太宗・高宗期に重なる。第一可汗國の滅亡によって、その傘下にいた多くの西北遊牧民族が唐の勢力下に入るようになった。唐が周邊諸民族に對する優勢を保ちながら軍事・外交を展開した時代である（以下、「第Ⅰ期」とする）。

第二の期間は、突厥第二可汗國の成立から、その瓦解の端緒にあたる默啜可汗の死去まで（永淳元年「六八二」～開元四年「七二六」）の約三〇年間で、武則天期から玄宗初期に相當する。北方では突厥を中心とする遊牧民が勢力を盛り返し、西方からは吐蕃の侵入が續き、唐と異民族との攻防は逆轉した（以下、「第Ⅱ期」とする）。そして第三の期間は、默啜可汗の死去から安史の亂勃發まで（開元四年「七二六」～天寶十四載「七五五」）の約四〇年間で、北方・西方の諸民族に對して唐が守勢に回る狀況に變わりはないものの、北方の霸權は突厥からウイグルへと移る（以下、「第Ⅲ期」とする）。唐に歸屬した異民族集團から輩出される蕃將の性質や動向は、このようなその時々政局に、大きく左右されたと思われるのである。

そもそも、唐に多くの蕃將が誕生する契機となつたのは、貞觀四年（六三〇）の第一可汗國滅亡後に行われた突厥遺民に對する措置であつた。唐に内附してきた突厥の人々への對應をめぐつては、北方に歸還させるべきだとする魏徵と、内地に安置すべきだとする溫彥博との間で激しい議論が繰り廣げられたが、結局、「其の酋首を選んで宿衛に居らしめ、威を畏れ德に懷かば、何の患いか之有らん^⑤」という溫彥博の主張が採用された。その結果、『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上に、

其の酋首の至る者は皆拜して將軍・中郎將等の官と爲し、朝廷に布列し、五品以上百餘人、因りて入りて長安に居る者^⑥は數千家。

とあるように、朝廷は諸部落の首領層に將軍・中郎將など南衙諸衛の高位武官職を授け、長安に居住した家は數千に及んだという。この待遇によって、當然ながら、『唐六典』に規定される定員（各衛左右につき大將軍一員・將軍二員）をはるかに上回る數の將軍・中郎將が朝廷に列をなした「石見一九九八a」。そのため、このような狀況に對しては一般に、彼らに與えられた官職に實質はないと考えられている。

その一方で、當時、北衙に任官していたことが確認できる蕃將（以下、便宜的に「北衙蕃將」とする）を収集してみると、『舊唐書』卷一〇九、契苾何力傳に「何力京に至り、左領軍將軍を授けらる。……尋いで北門に宿衛せしめ屯營の事を檢

校す」とあり、『新唐書』卷一一〇、阿史那社尒傳に「左驍衛大將軍を授けらる。……詔して北門左屯營を檢校せしむ」とあるように、南衛將軍職（左領軍將軍・左驍衛大將軍）と北衛武官職（北門宿衛檢校屯營事・檢校北門左屯營）を兼任している事例が散見する。それらの北衛蕃將を着任年代順に一覽にすると【表2】のごとくである。⁽⁷⁾表からは、第一に、著名な蕃將はいずれも北衛職を帯びていること、第二に、北衛を「檢校」職とする形は唐初の太宗・高宗期に顯著であるが、その後、その傾向は弱まっていくことを見て取ることができる。

これにはいつたい、どのような意味があるのであろうか。それを探るためにはまず、太宗期の蕃將の具體的なありかたを見なくてはならない。

3 太宗期の蕃將のありかた

唐の前半期には、頻繁に大規模な對外遠征が行われた。軍事行動に際しては、行軍と呼ばれる野戰軍組織が編成され、府兵よりもむしろ「兵募」や「蕃兵」が中心的な役割を果たしたとされる「菊池一九七〇」。⁽⁸⁾遊牧民の擁する騎馬兵もまた、このような征討時の軍勢力として期待され、動員された。このありかたは既に唐初の蕃將に見られるもので、太宗期に名を知られた蕃將は、唐將としてのキャリアのほとんどを對外遠征に費やしている。

この時期の蕃將の遠征に特徴的なのは、『冊府元龜』卷二一七、帝王部や同書卷九八五、外臣部に、

（貞觀十八年〔六四四〕十二月甲寅……行軍總管執失思力・行軍總管契苾何力、其の種落を率い、機に隨いて進討す。⁽⁹⁾

（貞觀）二十年（六四六）六月……帝延陀の破亡するを以て、江夏王道宗・左衛大將軍阿史那社尒を遣わして潮海安撫大使と爲し、又右領軍衛大將軍執失思力を遣わして突厥兵を領し、代州都督薛萬徹・營州都督張儉、各々所部の兵を統べ、道を分かちて竝進せしむ。又右驍衛大將軍契苾何力をして涼州及び胡兵を領して同に入らしめ、以て聲援を爲す。⁽¹⁰⁾

表2 唐前半期の北衙蕃將一覽

No.	姓名〔出身〕	出典	着任年代	北衙官職
1	阿史那忠 〔突厥〕	舊 109-3290		記載なし
		新 110-4116		記載なし
		No. 1396〔墓誌〕	貞觀 23 (649) 以降 總章 1 (668) 以前 上元 2 (675)	屯兵禁苑 羽林軍檢校 兼檢校羽林軍 (終官)
		昭 190〔墓碑〕	貞觀 4 (630) 貞觀 11 (637) 以降 永徽中 (650-655) 總章 1 (668) 以前	北門宿衛 檢校左屯營 □□北門□□ 檢校羽林如故
2	契苾何力 〔鐵勒〕	舊 109-3291	貞觀 7 (633) 乾封 1 (666)	北門宿衛檢校屯營事 檢校右羽林軍
		新 110-4117	貞觀 9 (635)	宿衛北門檢校屯營事
		萃 70-1229〔契苾明碑〕		檢校左羽林大將軍
3	阿史那社尒 (阿史那社爾) 〔突厥〕	舊 109-3288	貞觀 10 (636) 貞觀 14 (640)	典屯兵於苑內 檢校北門左屯營
		新 110-4114	貞觀 10 (636) 貞觀 14 (640)	典衛屯兵 檢校北門左屯營
4	執失莫訶友 〔突厥〕	No. 2838 〔執失善光墓誌〕	貞觀 19 (645) 以降	左羽林軍上下
5	阿史那思摩 (李思摩) 〔突厥〕	舊 194 上-5163		記載なし
		新 215 上-6039		記載なし
		No. 292	貞觀 20 (646)	檢校屯營事
6	阿羅憾〔波斯〕	No. 2520	顯慶中 (656-661)	北門□領
7	泉男生 〔高句麗〕	舊 199 上-5327		記載なし
		新 110-4123		記載なし
		No. 1555	總章 1 (668) 以降 儀鳳 4 (終官)	兼檢校右羽林軍 兼檢校右羽林軍 (終官)
8	李多祚 〔靺鞨〕	舊 109-3296	上元中? (674-675) 神龍 3 (707)	右羽林軍大將軍 右羽林大將軍 (終官)
		新 110-4124		右羽林大將軍領北門衛兵
		No. 2584	神龍 3 (707)	行右羽林大將軍 (終官)
9	黑齒常之 〔百濟〕	舊 109-3294	儀鳳中 (676-679) 嗣聖 1 (684)	兼檢校左羽林軍 檢校左羽林軍
		新 110-4121	儀鳳 3 (678)	檢校左羽林軍
		No. 2121	永昌 1 (689)	檢校左羽林軍 (終官)

No.	姓名〔出身〕	出典	着任年代	北衙官職
10	李謹行 〔靺鞨〕	舊 199 下-5359		記載なし
		新 110-4122		記載なし
		No. 1699	永隆 2 (681) 永淳 1 (682) 永淳 2 (683)	檢校右羽林軍 檢校右羽林軍 檢校右羽林軍 (終官)
11	康景休 〔ソグド〕	苑 647-3330 [露布]	神功 1 (697)	押飛騎
12	莽布支〔吐蕃〕	新 216 上-6080	聖暦 2 (699)	左羽林大將軍
13	泉獻誠 〔高句麗〕	舊 199 上-5328	天授 (690-692) 以前	兼羽林衛上下 右羽林衛大將軍 (贈官)
		新 110-4124	天授中 (690-692)	兼羽林衛 右羽林衛大將軍 (贈官)
		No. 2206	光宅 1 (684) 天授 2 (691) 久視 1 (700)	右羽林衛上下 右羽林衛上下 (終官) 右羽林衛大將軍 (贈官)
14	沙吒忠義 〔百濟?〕	苑 416-2108 [制誥] 鑑 208-6611		檢校左羽林衛 羽林將軍
15	野呼利 〔靺鞨?〕	舊 109-3297	神龍 3 (707)	羽林中郎將
		新 110-4125	神龍 3 (707)	羽林中郎將
16	王毛仲 〔高句麗〕	舊 106-3252		記載なし
		新 121-4335		記載なし
		鑑 210-6683	先天 2 (713)	龍武將軍
17	李楷洛 〔契丹〕	舊 110-3303	開元初 (713)	左羽林將軍同正
		新 136-4583		左羽林大將軍
		文 342-2059 [李光弼神道碑]		左羽林軍大將軍
18	蘇祿 〔突騎施〕	舊 194 下-5191	開元 3 (715)	左羽林軍大將軍
		新 215 下-6067	開元 5 (717)	左羽林大將軍
19	阿史那毗伽特勒 〔突厥〕	No. 2895	開元 8 (720)	兼羽林軍上下
20	可突于 〔契丹〕	舊 150-5352	開元 10 (722)	左羽林將軍
		新 219-6170	開元 6 (718) 以降	左羽林衛將軍
21	李邵固 〔契丹〕	舊 199 下-5352	開元 13 (725)	左羽林軍員外大將軍
		新 219-6171	開元 14 (726)	左羽林衛大將軍
22	李阿葛羅 〔契丹〕	No. 10624	開元 14 (726)	左羽林軍上下
23	李魯蘇 〔奚〕	舊 199 下-5356	開元 14 (726)	右羽林軍員外將軍
		新 219-6174	開元 6 (718) 以降	右羽林衛將軍

No.	姓名〔出身〕	出典	着任年代	北衙官職
24	啜沮禮 (李恂忠) 〔契丹 or 奚〕	No. 3395	開元 18 (730)	左羽林軍上下
25	李詩 〔奚〕	舊 199 下-5356 新 219-6175	開元 20 (732) 開元 7 (719) 以降	左羽林軍大將軍同正 左羽林軍大將軍
26	烏知義 〔烏洛候?〕	苑 647-3331 〔露布〕	開元 20 (732)	右羽林軍大將軍
27	安祿山 〔ソグド〕	舊 200 上-5367 新 225 上-6411		記載なし 記載なし
		冊 129-1412	天寶 9 (750)	兼右羽林軍大將軍員外置 同正員
		安-74	天寶 1 (742)	左羽林大將軍
		安-78	天寶 7 (748)	兼羽林大將軍員外置同正 員
		安-79		左羽林大將軍員外置同正 員
28	楊多過〔喃國〕	冊 965-11178	天寶 1 (742)	左羽林軍大將軍
29	都磨度闕頡斤 〔突騎施〕	冊 965-11178	天寶 1 (742)	左羽林軍大將軍
		冊 975-11288	天寶 1 (742)	左羽林軍大將軍員外置同 正員
30	史思禮 〔ソグド〕	No. 3514	天寶 3 (744)	右龍武軍翊府右郎將 右龍武軍翊府中郎將（終 官）
31	安波主 〔ソグド〕	苑 648-3333 〔露布〕	天寶 5 (746)	左羽林大將軍
32	高仙芝 〔高句麗〕	舊 104-3203 新 135-4576	天寶 10 (751) 天寶 10 (751)	右羽林大將軍 右羽林軍大將軍
33	毗方伽頡利發 〔突騎施〕	冊 965-11179	天寶 12 (753)	左羽林軍大將軍員外置 同正員

《凡例》

※本表は、文獻史料と石刻史料に確認される蕃將のうち、唐代前期（高祖～玄宗期）に北衙武官職に就官した者を収集し、着任年代順に配列したものである。

※複数の石刻史料集に採録されている墓誌等の録文については、原則として『唐代墓誌彙編』（上下 2 冊、上海古籍出版社、1992 年）・『唐代墓誌彙編續集』（1 冊、同、2001 年）に依拠した。

※出典欄では、立傳されている者については列傳の開始頁を、それ以外の者については登場頁を示した。

※また、略記については以下のとおりである。

「舊」=『舊唐書』「新」=『新唐書』 卷数+開始頁（中華書局標點本による通頁数）。

「鑑」=『資治通鑑』 卷数+開始頁（中華書局標點本による通頁数）。

「冊」=『冊府元龜』 卷数+開始頁（鳳凰出版社版による通頁数）。

「苑」=『文苑英華』 卷数+開始頁（中華書局版による通頁数）。

「萃」=『金石萃篇』 卷数+開始頁（臺灣・國風出版社版による通頁数）。

「文」=『全唐文』 卷数+開始頁（山西教育出版社版による通頁数）。

「安」=『安祿山事蹟』 卷数+開始頁（中華書局版・唐宋史料筆記シリーズによる通頁数）。

「昭」=『昭陵碑石』 録文開始頁（三秦出版社、1993 年）。

「No.」=『新版 唐代墓誌所在總合目録（増訂版）』（汲古書院、2009 年）目録中の通し番號。

とあるように、彼らがいずれも自らの部落の兵を率いて出征する点である（傍線部）^①。さらに右掲の蕃將は皆、南衛將軍號を帯びるが、そのうち契苾何力と阿史那社爾は、【表2】に示したように、北衛武官を兼任する「北衛蕃將」であった。本來、南衛という軍事組織の指揮系統からすれば、南衛將軍の職務は、各衛に所屬する折衝府の兵士の統括である。無論、その稱號を持つ蕃將たちも制度上はそうあるべきなのであろうが、前述の史料に現れる自部落兵を率いる従軍形態は、折衝府と關係があるようには見えない。つまり彼らは、南衛將軍として權限を行使しているのではないと考えるべきなのではないだろうか。となれば、彼ら蕃將が自らの兵權の據りどころとしたのは、いったい何であろうか。

太宗と蕃將たちは、各自が私的な紐帶で結ばれていた。一例として、『冊府元龜』卷三八四、將帥部に、李思摩（阿史那思摩）右武衛將軍と爲り、遼東を征するに従う。流矢の中^あつる所と爲るや、太宗親ら爲に血を吮う。其の顧遇せらるること此の如し。^②

という記事がある。また、執失思力の弟の子「執失善光墓誌」には、太宗と思力との關係について、太宗思力と血を歃り盟して曰く、「代々子孫、相い侵擾すること無かれ」^③と。

と述べられる。太宗と蕃將との親密さが垣間見えるこれらの記述は、テュルク系諸部族が太宗を天可汗に推戴したように、北方の氏・部族制的な社會のありかたを彷彿とさせる。北方の遊牧系諸種族の間では、國に對する忠誠心よりも、むしろ個人間の忠誠心が重視されるのである。

したがって、彼らにとって、唐皇帝そのひととの君臣關係の「あかし」として最も効果的な指標は、皇帝の側近武官に任命されることであつた。逆に唐側の視點に立つと、異民族の擁する騎馬軍事をそっくりそのまま唐のものとして利用するためには、それを統率する部族長と、緊密な君臣關係を構築しておく必要があつた。そこで唐朝廷は、このような北方民族の慣習を意識しつつ、各部族長の統率する兵力の多寡に應じて、彼らを特別な蕃將として皇帝の側近武官のうち最も私的な性格の強い北衛に配した。そのことによって、彼らに及ぼす皇帝の求心力を高めようという思惑があつたことは、

首肯されてよい。蕃將に北衛武官職を授ける意味は、その點にこそあったといえよう。

では、なにゆえ北衛蕃將は、南衛將軍職をも兼任したのだろうか。實は北衛は、唐の前半期を通じて宮廷政治と關わりあひながら段階的に發展した、新たな、それゆえに不定形の軍事組織であつた。太宗期には、前述の『通典』卷二八、職官典一〇の記事に見えるように、北衛（當時は單に「左右屯營」と呼ばれた）の兵士は南衛諸衛將軍の管轄下に置かれたこととや、玄宗期の『唐六典』編纂時には龍武軍の軍額が存在していなかつたために、同書の北衛に關する記載は羽林軍のみで、もう一方の護衛兵系統（百騎↓千騎↓左右萬騎）の記述が缺落していることも、一定不變ではない北衛のありさまを物語る（龍武軍は開元二十六年、『唐六典』の完成と前後して「左右萬騎」からの改稱によつて成立する）。北衛は、發展とともに順次、官制の中に組み込まれていったのである。

そのため、北衛の官職は、當初はそれ自體に官品が附されない令外官として扱われたであらう。北衛の官職が正式に置かれるのは、羽林大將軍が設置された武則天の天授二年（六九二）頃と考えられる。そのような状況下では、北衛の武官は、それに對應する官品の南衛職事官を同時に帶びることで、自らの身分を示す必要があつた。つまり、この時期の北衛蕃將が持つ南衛將軍職には、官位や俸祿を擔保する寄祿官的な機能があり、しかもそれは蕃將の實質、すなわち皇帝との關係性を背景に任命された北衛武官としての立場を律令官制に位置づける役割を果たしていた、と考えられるのである。

以上が、唐に北衛蕃將が誕生した頃の彼らのスタイルである。それならば、高宗期以降、この體制はどのように變化するのであらうか。

二 北衙蕃將の盛衰と變貌

1 高宗期における蕃將の繼承と變容

唐皇帝と蕃將とのつながり、とりわけ太宗期から高宗期への蕃將の聯續性を考える際に示唆的なのが、太宗崩御を機に謀叛した阿史那賀魯であろう。三次に及ぶ討伐遠征の末、賀魯は石國で捕虜となり長安に連行された。『舊唐書』卷一九四下、突厥傳下には、その道中の述懐として、

顯慶二年（六五七）、……賀魯（蕭）嗣業に謂いて曰く「我破亡の虜なるのみ。先帝我に厚くす。而るに我之に背く。今日の敗は、天我を怒るなり。舊聞するに漢法、人を殺すに皆都の市に於いてす。京に至りて我を殺さば、請うらくは昭陵に向かい、罪を先帝に謝するを得しめんことを。是れ本願なり」と。⁽¹⁴⁾

と傳えられる。ここでは阿史那賀魯は、先帝（太宗）から受けた恩義を自覺する一方で、新帝（高宗）との関係には言及しておらず、帝位繼承が君臣關係の更新に無條件に結びつくわけではない、という彼ら遊牧民の意識を垣間見ることができ。このように、個人對個人を重視して構築される北方的君臣關係は、その性質ゆえに、代替わりに伴う斷絶の可能性を孕んではいたが、『資治通鑑』卷一九九、太宗貞觀二十三年（六四九）八月條に、

庚寅、文皇帝を昭陵に葬る。廟號は太宗なり。阿史那社爾・契苾何力、身を殺して殉葬せられんことを請うも、上人を遣わし諭するに先旨を以てして許さず。⁽¹⁵⁾

とあることから考えても、多くの蕃將は、舊主との關係を強く意識しながらも、高宗を新たな君主として認め、これまでと同様に唐の對外戦力の一翼を擔ったと思われる。

では、蕃將と北衙との關係についてはどうであろうか。阿史那社爾・阿史那忠・契苾何力など太宗の舊臣にして歴戦の

北衙蕃將（假に「第一世代」とする）の最大の特徴は、「宿衛すること四十八年」（『新唐書』阿史那忠傳）とあるように、北衙に任官した期間の長さである。後代になるほど流動性が増す北衙將軍職と比較しても、この差は歴然としている。太宗の意圖した北衙蕃將としての彼らの位置づけが、太宗亡き後も、ある程度安定した形で運用されていたことの現れといえう。

その一方で、高宗期には蕃將の勢力構圖に變化が現れる。それは、前述の北方出身第一世代から第二世代への代替わりと、新羅の朝鮮半島統一によつて唐へ亡命を餘儀なくされた高句麗・百濟人の蕃將の新規參入である。第二世代としては、第一世代の蕃將集團の一族から輩出された阿史那道眞（阿史那忠の子）・契苾明（契苾何力の子）などがあげられるが、北衙職の世襲は見られない。一方、高宗前期には、李謹行・李多祚など靺鞨出身の北衙蕃將が確認される。彼らはいずれも親の世代に唐に内附してきたのであるが、『舊唐書』卷一〇九、李多祚傳に、

李多祚、代々靺鞨の酋長なり。多祚驍勇にして射を善くし、意氣感激たり。少くして軍功を以て位を歴して右羽林軍大將軍たり。前後して禁兵を掌り、北門に宿衛すること二十餘年。⁽¹⁶⁾

とあるように、世襲ではなく自己の軍功によつて北衙職を得ている。これに對して東方出身の蕃將は、高句麗の王族である泉男生・獻誠父子が歸屬の證左としてそれぞれ「行右衛大將軍兼檢校右羽林軍」（『泉男生墓誌』）・「左衛大將軍右羽林衛上下」（『泉獻誠墓誌』）のように北衙職を授官されているほか、『舊唐書』卷一〇九、黑齒常之傳に、

儀鳳中、吐蕃邊を犯し、常之李敬玄に従ひ之を撃つ。……高宗其の才略を歎え、擢して左武衛將軍を授け、檢校左羽林軍を兼ね、金五百兩・絹五百匹を賜ひ、仍りて河源軍副使に充つ。⁽¹⁷⁾

とあるように、功績をあげて北衙に入る者もいる。なお、北方出身の蕃將と東方出身の蕃將とは、それぞれに期待される役割や戦力に何らかの相違があったと豫想されるが、『唐六典』卷三、尚書戸部の、

輕稅諸州・高麗・百濟の應に征鎮に差さるべき者は、竝びに課役を免ぜしむ。⁽¹⁸⁾

という記述が示すように、高句麗・百濟遺民もまた、突厥遺民と同様に對外遠征の際の兵力として利用されたことは確かである。この記述は、開元七年令以前に條文として存在し、『天聖令』賦役令の不行唐令には見られないことから、開元二十五年令の段階で削除されたと考えられる。この條文の制定はおそらく高宗期であり、その時代の變遷とともに、玄宗期にはもはや意味を持たない規定となったのであろう。⁽¹⁹⁾

また、『舊唐書』卷七三、薛元超傳に見える次の記述からは、高宗とその時代を生きた官僚たちの蕃將に對する意識の變化がうかがえる。

時に高宗溫泉に幸して校獵するに、諸蕃の酋長も亦た弓矢を持ちて従う。元超以爲らく既に族類に非ざれば、深く虞いと爲すべしと。上疏して切諫し、帝焉を納る。⁽²⁰⁾

高宗末年の上元三年（六七六）、薛元超は、高宗が狩獵に赴くにあたり、異民族の酋長が弓矢を携帶して隨従することに反對した。この發言はひるがえって、君主の狩獵に部族長格が武裝して參加するという北方の習俗色濃く漂うこの方法が、當時の「皇帝校獵」の常道であつたことを物語る。薛元超による諫言の全容は、『文苑英華』卷六九四に、「諫蕃官仗內射生疏」として採録されているので、前掲『舊唐書』に對應する箇所をもう少し詳細に見てみよう。

又諸蕃の首領羽獵に參預するに、天皇（高宗）德を以て綏懷し、遂に以て弓を操り矢を持す。既に族類に非ざれば、深く用て虞いと爲す。……三韓の雜種、十角の渠魁、天顏に咫尺する勿く、交戟の外に處らしめよ。⁽²¹⁾

右の上奏文によれば、薛元超が危惧したのは、蕃將たちが武裝を解かず高宗に伺候することの危険性であつた。このように唐の官僚が蕃將に對する警戒を強めたのは、突厥可汗國再興へとその兆しを見せ始めた北方情勢と無關係ではない。この傾向は、後述するように、次の武則天期により顯著になる。

このように見てくると、第Ⅰ期の唐領域内には、大別して、北方より歸屬した集團と、東方より歸屬した集團が存在し、そこから誕生した蕃將たちは、對外情勢を反映しながら次のように推移したということができよう。すなわち、太宗期に

は北方テュルク系の蕃將が主力であつたが、高宗中期以降は、新羅の半島統一や羈縻支配の搖らぎを機に、太宗舊臣と入れ替わるようにして、高句麗・百濟等の東方系の蕃將が對外遠征の記事に登場するようになった。この狀況は當然、北衙蕃將の分布にも影響したと思われる。この轉換の背景には、どのような狀況があつたのであろうか。

2 對北方情勢と蕃將の質的變化

さて、唐代前期を對外情勢の變化によつて三分したうちの、第Ⅰ期（太宗・高宗期）と、第Ⅱ期（武則天・玄宗初期）とのターニングポイントを、本稿では永淳二年（六八三）の突厥第二可汗國の成立に置いた。というのも、突厥を中心とする遊牧民の復興は、唐と北方異民族との外交上の力關係を逆轉させ、唐はそれまでの版圖擴大路線から一轉、國境防衛路線へと政策を轉換せざるをえなくなつたからである。

それまで恭順の意を示していた突厥をはじめとする北方遊牧民族は、調露元年（六七九）の單于都護府方面での反亂を機に唐から離反し、永淳二年に阿史那骨咄祿が可汗に即位して突厥第二可汗國が成立した。その後を繼いだ默啜可汗は、『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上に、

聖曆元年（六九八）、默啜表して則天と子と爲らんことを請い、并せて女有りと言ひ、和親を請う。初め、咸亨中（六七〇—六七四）、突厥諸部落の來りて降附せる者は、多くは之を豐・勝・靈・夏・朔・代等の六州に處らしめ、之を降戸と謂う。默啜是に至りて又此の降戸及び單于都護府の地を索め、兼ねて農器・種子を請うに、則天初め許さず。默啜大いに怨み怒る。……時に朝廷其の兵勢を懼れ……遂に盡く六州の降戸數千帳を驅り、種子四萬餘碩・農器三千事と并せて以て之に與う。默啜浸く強きは此に由るなり。⁽²⁾

とあるように、唐の領域内に残る舊内附民を吸収しながら勢力を擴大した。さらに武則天に對して、自分の娘に皇族を降嫁させることを要求したが、武氏一族である武延秀が婿として送られて來たため、默啜は唐の使者に對して、

我が女李家の天子の兒に嫁さんと擬るも、你今武家の兒を將て來たる。此れは是れ天子の兒なるや否や。我が突厥積代已來、李家に降附す。今李家の天子の種末總じて盡き、唯だ兩兒の在する有るのみを聞く。我今將に兵もて助立せん。⁽²³⁾

と述べ、武周を否定し李唐を正統と認めて、武周政權打倒を掲げて侵攻を開始した。その攻撃は、武則天が唐室の廬陵王（の中宗）を皇太子に据えるまで續いた。こうした當時の情勢は、必然的に、北方に出自を持つ蕃將の減少を招いたであろう。

加えて、文成公主が永隆元年（六八〇）に死去すると、高宗中期より見られた吐蕃の侵攻も活潑化し、領界をめぐる唐との衝突がたびたび外交問題となった。西方出自の蕃將から北衙蕃將が誕生した例としてはわずかに、『舊唐書』卷一九六上、吐蕃傳に、

聖曆二年（六九九）……贊婆所部千餘人及び其の兄の子莽布支等を率いて來降するに、則天羽林飛騎を遣わして郊外に之を迎えしむ。贊婆に輔國大將軍・行右衛大將軍を授け、歸德郡王に封じ、優賜すること甚だ厚く、仍りて其の部の兵を洪源谷に領して討撃せしむ。⁽²⁴⁾

とあり、内紛から逃れてきた吐蕃の王族を安堵して、吐蕃との防衛線上に配置し、部族長格の莽布支に左羽林大將軍を授けた（『新唐書』吐蕃傳）ことが確認されるのみである。また、『唐會要』卷五六、省號下、左右補闕拾遺には、天授三年（六九〇）の薛謙光の上奏文として「請止四夷入侍疏」があり、

臣愚の慮る者を以てすれば、國家方に無窮の祚を後に傳えんとす。脱し備守謹まず、邊防圖を失えば、則ち夷狄の兵を稱ぐる⁽²⁵⁾こと、方外に在らず。中國を肥やし、四夷を削る所以、萬乗を經營するの業、厥の孫に謀を貽すの道に非ざるなり。臣愚以爲えらく侍子に充つるを願う者、一に皆禁絶せよ。必ず若し中國に在らば、蕃に歸らしむ可からず。則ち夷人疆を保てば、邊邑は事無からん。

と述べられ、異民族を唐の中心部に雑居させることへの反発と、王族クラスの異民族の中國往來を遮斷する必要性が唱えられている。唐の内情が異國に傳わることを恐れたゆえの措置であろう。このように第Ⅱ期は、北方の突厥、西方の吐蕃がともに不穩な動きを續ける中で、唐王朝が從來の邊境經營の方針轉換に苦慮した期間でもあった。

さらに後の情勢を見ると、第Ⅲ期（玄宗期）は、開元四年（七一六）の默啜可汗の死去を機に突厥第二可汗國が瓦解し、分裂した諸部族による民族移動の波が唐の領域に及ぶところから始まる。ほぼ玄宗期にまたがるこの第Ⅲ期には、新たに二つのタイプの蕃將が史料に現れる。その第一は、ステータスとして禁軍將軍職を授與される名目型蕃將である。そこさらに北衙蕃將を抽出してみると、『舊唐書』卷一九四下、突厥下、蘇祿の條に、

開元三年（七一五）、制授して蘇祿を左羽林軍大將軍・金方道經略大使と爲し、進みて特勤と爲し、侍御史解忠順を遣わして璽書を齎え冊立して忠順可汗と爲さしむ。⁽²⁶⁾

とあり、また『冊府元龜』卷九六五、外臣部に、

（天寶）十二載（七五三）九月、骨咄祿三姓毗方伽頡利發を左羽林軍大將軍員外置同正員と爲し、又骨咄祿毗伽を以て突騎施可汗と爲す。⁽²⁷⁾

とある。これらは、突騎施の族長に北衙軍職中の最高位にあたる左羽林大將軍を授けた例である。また、

（開元）十年（七二二）、（李）鬱于入朝して婚を請う。……鬱于の蕃に還るや、可突于來朝し、左羽林將軍を拜し、并州に幸するに従う。……十三年（七二五）、……可突于李盡忠の弟邵固を立てて主と爲す。其の冬、車駕東巡し、邵固行在所に詣り、因りて従いて嶽下に至り、左羽林軍員外大將軍・靜析軍經略大使を拜し、廣化郡王に改封せられ、又皇從外甥女陳氏を封じて東華公主と爲し以て之に妻す。⁽²⁸⁾

のように、契丹の王族・李邵固とその臣下・可突于も羽林將軍を授與されている。

けれども彼らは、太宗期のテュルク系蕃將のように、北衙職に任命されることで、皇帝の信賴厚い、實際に動員可能な

戰鬪要員として、配下の戰鬪員ごと唐の軍勢力に組み込まれたわけではない。右の史料は、朝貢關係にある異民族の長に、唐との外交上の關係を表す指標として北衙將軍號を賜與したもので、彼らは來朝によって、名目的に唐の蕃將とみなされ、たに過ぎないのである。

ところで、そもそもなぜ、この時期に名目的な蕃將の存在が目立つようになったのであろうか。彼らとは正反對の、實職のある蕃將たちはどうなったのであろうか。實は、この現象の裏には、より深刻な問題が存在するのである。

3 玄宗期の蕃將と節度使

玄宗期に顯著となるもう一つのタイプの蕃將は、節度使やその旗下で頭角を現す者たちである。この形態については、『資治通鑑』卷二一六、玄宗天寶六載（七四七）十二月條にそのありかたが示されているので、それを取り上げてみよう（「」内は胡注）。

唐興りて自り以來、邊帥皆忠厚の名臣を用い、久しく任ぜず、遙領せず、兼統せず、功名の著しき者は往々にして入りて宰相と爲る〔李靖・李勣・劉仁軌・婁師徳の如きの類は是なり。開元以來、薛訥・郭元振・張嘉貞・王峻・張說・杜暹・蕭嵩・李適之等も亦た皆邊帥自り入りて相たり〕。其れ四夷の將、才略は阿史那社爾・契苾何力の如きと雖も猶お大將の任を専らにせず、皆大臣を以て使と爲し以て之を制す〔社爾の高昌を討つは、侯君集元帥と爲り、何力の高麗を討つは、李勣元帥と爲る〕。開元中に及び、天子四夷を吞するの志有りて、邊將と爲る者は十餘年易えず、始めて久しく任ぜず〔王峻・郭知運・張守珪の類は是なり〕。皇子は則ち慶・忠の諸王、宰相は則ち蕭嵩・牛仙客、始めて遙領す。蓋嘉運・王忠嗣は數道を專制し、始めて兼統す。李林甫邊帥入相の路を杜がんと欲し、胡人の書を知らざるを以て、乃ち奏して言う「文臣は將と爲るも、矢石に當たるを怯るれば、寒峻の胡人を用いるに若かず。胡人は則ち勇決にして戰に習い、寒族は則ち孤立して黨無し。陛下誠に恩を以て其の心を洽ぐれば、彼は必ず能く朝廷の爲

に死を盡くさん」と。上其の言を悦び、始めて安祿山を用う。是に至りて、諸道の節度は盡く胡人を用い〔安祿山・安思順・哥舒翰・高仙芝は皆胡人なり〕、精兵は咸な北邊を成り、天下の勢は偏重し、卒に祿山をして天下を傾覆せしむるは、皆林甫の寵を専らにし位を固むるの謀より出づるなり。⁽²⁹⁾

この記事は、「自唐興以來」以下の太宗期の状況と「開元中」の玄宗期の状況とを對比しつつ蕃將の變化を描寫し、李林甫の甘言を鵜呑みにした玄宗による蕃將の節度使への安易な登用と、それに起因する邊境經營の破綻が安史の亂を招來した、と非難する論調である。注目すべきは、二つの時期における蕃將起用の變化を述べている點である。邊境防衛の手段も、太宗期は行軍遠征であり、玄宗期は節度使體制による恆常的な軍團の駐屯であつて、形態に大きな差異があるが、そればかりではなく、玄宗期には、太宗期にはなされていなかった地方軍職の「久任（長期間の留任）」「遙領（現地に赴任せずに管理する）」「兼統（複数の行政區域を廣域に統括する）」が常態となつていた。さらに、出征時の軍事權の發動に際しては、酋帥とはいえども常に漢人大臣の監視下にあつた太宗期の蕃將に對して、玄宗期の蕃將は、ほとんどが節度使やあるいは節度使旗下の軍人として地方出向を命じられ、長期にわたつて邊境防備の任にあたつた。その政策にはもはや、「四夷の將」に對する慎重さも警戒の色もうかがえない。

かくして、邊境に追いやられる形となつた玄宗期の蕃將にとつての要職は、もはや南北衙の禁軍將軍職ではなく、節度使下の軍職へと變わつた。當時、唐の西・北・東北邊の境界に沿つて置かれたいわゆる「天寶の十節度使」のうち、安西節度使（兵力二四、〇〇〇）に高仙芝が、河西節度使（兵力七三、〇〇〇）に安思順が、隴右節度使（兵力七五、〇〇〇）に哥舒翰が、そして范陽節度使（兵力九一、〇〇〇）と平盧節度使（兵力三七、五〇〇）に安祿山が就任したように、五節度使を蕃將が占め、これらは十節度使の總兵力の六三％に及んだ。⁽³⁰⁾ 地方の軍事力が一人の蕃將に過度に集中し、邊境防衛軍としての藩鎮が大規模・廣域化している様子が看取される。一方で、前述の五節度使のうち北衙と關係を持つのは、天寶十載（七五二）、石國をめぐるアッバース朝と衝突した「タラス河畔の戦い」からの歸還後に羽林將軍を授官された、高仙芝

ただ一人なのである。

前述の『通鑑』記事が示唆するように、蕃將は、地方で巨大な軍事力を統括してはいても、もはや北衙などの中央官に就任する途は斷たれていた。當然、皇帝（玄宗）との個人的紐帶を形成する機會にもほとんど恵まれなかったであろう。このことが、北衙蕃將の減少を招く一因となった。一方で、玄宗はつとに、自身の爪牙たる親衛軍として左右龍武軍を厚遇した。玄宗と龍武軍とは、親王時代から私的に君臣關係を築き、二度の政變〔表一〕（E）誅韋后一派の變・（F）誅太平公主一派の變で苦樂を共にした間柄であつた。そのため、即位後、改めて側近兵を組織する必要もなく、蕃將に北衙將軍號を與える政策的重要性も見出せなかつたと思われる。そうして中央から疎外された節度使型蕃將は、長期逗留した任地の在地勢力と結びついて獨自の軍事基盤を築いた。蕃將自身も、太宗期の部族長型から、玄宗期には個人武將型へと變化しており、玄宗期の蕃將は、異民族の出身ではあつても部落民と直接結びつけられていない一個人である場合が多い〔谷口一九七八〕。

すなわち、玄宗期の北衙に名目型蕃將が目立つようになるのは、國內にいる蕃將の多くが地方に外向して節度使的な實職を持ったことと相關があり、この兩側面はいわば表裏一體の現象といえよう。

以上、本節で述べた蕃將の變遷について、あらためてまとめてみたい。第Ⅰ期に見られるのは、突厥第一可汗國崩壊後に内附してきた北方系第一・第二世代で、部落兵を率いて従軍する形で唐の軍事力に組み込まれている。中でも皇帝との親密度の高い者には北衙武官職が授けられ、そのことがこの軍事體系を強固なものにしていた。第Ⅱ期になると、突厥第二可汗國の勃興に伴ってテュルク系の蕃將が減少し、第Ⅰ期の後半から新たに加わった東方出身の蕃將の存在感が増す。そして第Ⅲ期では、節度使型蕃將と名目型蕃將が登場し、蕃將が邊境に長期にわたって駐屯し、中央から北衙蕃將の存在が薄れていく一方で、北衙將軍職は、外交上のステータスとして異民族首長に授與されるという現象が顯著になる。つまり、谷口哲也氏のいわれた「部族長型」蕃將とは第Ⅰ期の形態を、「個人武將型」蕃將とは第Ⅲ期の形態を指していたの

である。³¹⁾

それならば、今度はあらためて「北衛の變容」という視座に立つてみると、右のような蕃將の形態の變化は、いかなる意味を持つであろうか。

三 北衛禁軍の段階的發展と蕃將の動向

第一節で述べたように、唐代前期の北衛は宿衛兵と護衛兵との二系統で構成され、北衛體制の發展は後者、すなわち百騎、千騎、左右萬騎と擴大する護衛兵系統の伸張の結果でもあった。『資治通鑑』卷二一〇、睿宗景雲元年（七一〇）八月條には、

萬騎諸韋を討つの功を恃み、暴横多し、長安中之に苦しむ。詔して竝びに外官に除す。又戸奴を以て萬騎と爲すを停む。更に飛騎を置き、左右羽林に隸せしむ。³²⁾

とあるように、李隆基（のちの玄宗）が左右萬騎の兵力を用いて韋后一派を誅殺した政變（E）ののち、その功績ゆえに増長した護衛兵系統・萬騎を處罰するとともに宿衛兵系統・飛騎が増員され、萬騎と飛騎の勢力を拮抗させて内部の均衡を保とうとするさまが見える。萬騎はその後、玄宗中期の開元二十六年（七三八）に左右龍武軍に昇格し、その治世の末年まで玄宗腹心の親衛軍として隆盛を極めた。『新唐書』卷五〇、兵志に、

玄宗の萬騎を以て韋氏を平らぐるに及び、改めて左右龍武軍と爲す。皆唐元功臣の子弟を用い、制して宿衛兵の若くす。³³⁾

とあるように、龍武軍とは、玄宗の權力基盤となった「唐元功臣」³⁴⁾の子弟を中核とする近衛軍團であり、太宗期の蕃將たちが特に太宗個人への忠誠を意識したのと同様に、唐元功臣たちは玄宗の親衛隊としての意識を強く持っていた。

ところで、唐初の蕃將に授與された北衛武官職は、その役職に附隨する權威、すなわち皇帝との紐帶の強度を明示する

という点で、蕃將と配下の軍事力をつなぎとめる重要な切り札であった。そこで蕃將が就任した北衙職の分布を、ここでもう一度、【表2】から確認してみると、計三三名のうち、左右羽林軍の將軍職やそれに準じる左右屯營・飛騎の號を帶びた者は實に三〇名にのぼる一方で、左右龍武軍（百騎・千騎・萬騎）につながる武官職を帶びた者は、〔No.16〕王毛仲と〔No.30〕史思禮の二名に過ぎないことが分かる（〔No.6〕阿羅憾は不明）。つまり蕃將は一貫して、政變に乗じて勢力を増す新勢力Ⅱ護衛兵系統ではなく、皇帝の親衛兵として傳統のある羽林軍Ⅱ宿衛兵系統と結びついてきたのである。⁽³⁵⁾

ところが、時代が下るにつれて、宿衛兵系統は護衛兵系統の擴大と反比例して軍事的な實質を失い、皇帝と北衙との結びつきの重心は、次第に羽林軍から龍武軍へと傾いてゆく。羽林軍が弱體化すれば、羽林軍を媒介に皇帝と關係を保っていた蕃將の主從意識も稀薄になっただろうことは想像に難くない。その結果、羽林軍は、太宗期の北衙には確かに付與されていた「皇帝と蕃將との強力な紐帶を演出する」という機能を徐々に喪失し、羽林將軍は、その稱號のみに價值がある官職へと變質したのである。

ただし、それでも當時の周邊異民族の首長たちにとっては、羽林將軍號がある程度の意味を持つて受けとめられていた点には留意しておきたい。たとえば、安史の亂期のことであるが、安祿山を弑して即位した安慶緒が、側近の阿史那從禮と安守忠に左羽林大將軍を與えている。⁽³⁶⁾この例から見ると、羽林將軍號については、羽林軍が凋落の一途をたどっていたとはいえども、異民族にとっては、「傳統ある禁軍の將軍」という榮譽を示す一種の勳章として、その價值を保持していたと考えてよさそうである。

このような北衙の内的要因とは別に、蕃將そのものを取り巻く環境の變化によって、蕃將の性格自體も推移する。太宗期には常態であった、部落民を率いる首領クラスの蕃將という形態が徐々に史料から姿を消し、中央にいる蕃將と地方にいる蕃兵とが、酋長と部落民として關係づけられているという構圖も消失してゆくのである。そのことはつまり、皇帝の近く（物理的・心理的雙方の意味で）に蕃將を配置することで、蕃將を通して、異民族の軍事力を中央に一元的に集約する

體制が崩れたことを意味する。少なくとも、北衙はその機能を喪失したのである。すなわち、唐初以來、蕃將は羽林軍系統の職號によつて皇帝と結びついていたが、その羽林軍が北衙の中心的地位を失うにつれて、蕃將と皇帝とのつながりは弱まった。羽林軍のありかたと蕃將の形態の變容とは、表裏一體の現象だったのである。

なお、玄宗期の北衙蕃將で、部落民を統率していることが確認できる例としては、「阿史那毗伽特勤墓誌」に、

開元三年（七一五）……使いて三窟の九姓を招慰せしめ、因りて九姓とともに默啜を斬り、首を京師に傳う。朝廷庸に疇い、將軍に増秩し、舊部落を統べしむ。……時に胡族干誅し、河曲を動搖するに、訊を執え醜を獲るは、緊將軍に頼れり。遂に羽林軍上下を兼ね³⁷⁾。

とあり、また「啜祿君妻鄭實活墓誌」に、

夫人去る開元十八年（七三〇）、林胡の不寧に屬し、酋首背伴す。夫人霜操は易えず、忠志は移らず、迺ち潛かに運奇を謀り、男の沮禮等と死を出でて生に入り、衆を率いて漢に投ず。……十八年八月十三日、制して男沮禮に授けて父の冠軍大將軍・右武衛將軍・左羽林軍上下を襲^つがしめ、錦袍鈿帶を賜う。³⁸⁾

とあるので、太宗期以來の酋長——部落民關係による異民族の軍事的動員が、完全になされなくなったわけではない。むしろ『舊唐書』卷九七、郭元振傳に、中宗期のこととして、

是より先、娑葛阿史那闕啜と忠節和せず。屢しば相い侵掠し、闕啜の兵衆は寡弱にして、漸く支うる能わず。元振奏して闕啜を追いて入朝宿衛せしめ、其の部落を移して瓜・沙等の州に入れて安置せんことを請う。制して之に従う。闕啜行きて播仙城に至るに、經略使・右威衛將軍周以悌と相遇し、以悌之に謂いて曰く「國家高班厚秩を以て君を待する者は、君の部落を統攝し下に兵衆有るを以ての故なり。今輕身もて入朝すれば、是一老胡のみ。在朝の人、誰ぞ復た喜び見んや。唯だ官資の得難きのみに非ず、亦た性命の人に在るを恐る。……」³⁹⁾と。

とある記事に象徴されるように、蕃將は配下に部落兵を率いているからこそ唐の朝廷で厚遇されるのであり、部落から切

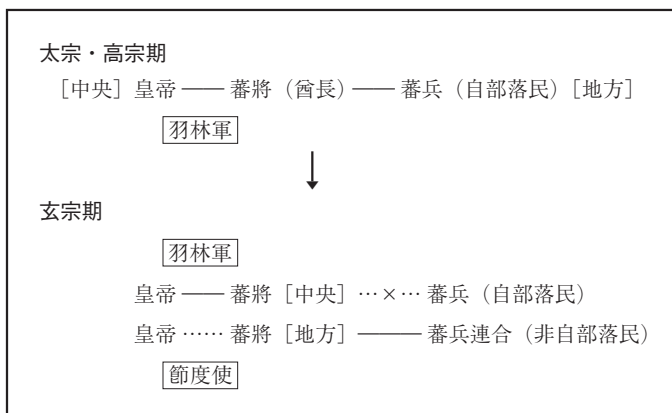


圖 1 北衙を媒介とする蕃將の推移

り離された蕃將一個人の價值などたかが知れていると思われていた。したがって、たとえ酋長クラスの出自ではなくとも、多くの場合、史料上に見える蕃將の軍事的活躍は、それぞれの出身部落によって支えられていたと見てよいだろう。ただし逆の言い方をすれば、右掲『舊唐書』は、蕃將の中央入朝によって、蕃將と部落民との関係は容易に寸斷される可能性があることをも示している。太宗期の蕃將は、平時は都に居住して宿衛な

どの任にあたり、對外遠征の際は、安置された地に残された部落民と合流して戦地へ向かうという形態をとるのが主流であった「山下二〇一一」。蕃將と部落兵の物理距離は、彼らの心理距離には何ら影響しなかったのである。それに對してこの場合、蕃將と部落兵とが物理的に遠く隔たっていることが、部落兵を統率する際の大きな障礙とみなされている。この點が、太宗期の蕃將と大きく異なっており、この意味でも蕃將は、現地を離れることができなくなっていたのである。

總じていえば、玄宗期には、節度使などの地方軍事職を通じて地方で蕃兵と關係を築く蕃將は中央から疎外されており、また彼らが自らの配下を制御するためにも、任地を離れる必然性はなくなっていた。このような蕃將の固定化によって、蕃兵の軍事力は地方に、そして節度使に集約されていた。このことは、北衙羽林軍の勢力の低下と表裏一體の現象であった。この狀況が進行すると、異民族の軍事力は蕃將とともに地方に蓄えられたままになり、蕃將を北衙に起用して軍事力を間接的に中央に吸い上げるといふ當初の體制は、ほとんど瓦解してしまった。こうして唐の邊境地帯、

とりわけ漢人・非漢人が雜居するベルト状の地帯に蓄積したエネルギーが、安史の亂につながる原動力の一つになったと考えられる。安史の亂は、唐國內の情勢のみならず、より廣い東アジア國際社會を視野に入れて捉えなおされるべきではないだろうか。

以上述べてきた皇帝・蕃將・蕃兵の關係性の變化を圖示してみると、【圖一】のごとくである。

おわりに

以上、本稿で述べたことをまとめると、

① 唐の前半期における蕃將は、次の三期間でそれぞれ性格を異にする。第Ⅰ期は、ほぼ太宗・高宗期と重なり、蕃將の大多數は突厥第一可汗國崩壞後に内附してきた者で、部族長として部落民を率いている。第Ⅱ期は武則天→玄宗初期であり、突厥第二可汗國の成立から默啜可汗の死去までにあたる。この時期にはテュルク系の蕃將が減少し、代わって朝鮮方面出身の蕃將が存在感を増す。第Ⅲ期はほぼ玄宗期と重なり、新たな形態として、邊境を廣域に統括する節度使型蕃將と、朝貢關係にある異民族首長が授官される名目型蕃將が現れる。

② そもそも唐初に蕃將が南衛將軍號を帯びた理由については從來未解明であったが、この時期の北衛蕃將が持つ南衛將軍職には、官位や俸祿を擔保する寄祿官的な機能があり、しかもそれは蕃將の實質、すなわち皇帝との關係性を背景に任命された北衛武官としての立場を律令官制に位置づける役割を果たした。つまり蕃將は、南衛のシステムに組み込まれるのではなく、北衛を媒介にして唐皇帝との緊密な關係を築いたと考えられる。

③ 唐の北衛は、宿衛兵系統の左右羽林軍と、そこから選拔された護衛兵系統とに區分される。當初は前者が主力であったが、武則天期から後者が百騎→千騎→左右萬騎と發展し、玄宗期には左右龍武軍となって、完全に羽林軍と勢力を逆轉させた。唐代前期の北衛蕃將は、このうち、宿衛兵系統である左右羽林軍の武官職を帯び、護衛兵系統の官職を帯び

る者はほとんど見られない。北衙蕃將は、羽林軍を通じて皇帝との紐帶を構築したのであり、羽林軍の凋落と龍武軍の確立によって、その結びつきは薄れた。それは、上述①の蕃將の性格變化と表裏一體の現象ととらえられる。

④ 唐初の北衙職は、皇帝と蕃將との親密度を示すバロメーターであるとともに、蕃將が率いる地方の部落兵を中央に集約する役割を擔っていた。ところが、對外情勢と聯動する蕃將の變容と、羽林軍の求心性の低下という二つの外的・内的要因によって、北衙は従前の機能を喪失し、蕃將はもはや中央とのつながりを構築しえなくなった。ここに至って、軍事面での一元的な中央集權體制は崩れたのである。その結果、蕃將は邊境に活躍の場を求め、節度使として邊軍や蕃兵を率いることとなり、地方の軍事力は節度使に集約されるようになった。この現象が、ひいては安史の亂を招く一因となった。

のごとくになろう。

従來の異民族の軍事力に對する研究では、皇帝近衛兵・北衙の存在は全く念頭に置かれてこなかったが、このように北衙と蕃將のつながりを見てみると、唐の蕃將や蕃兵のありかたが、さらには帝國としての唐のありようが、より明確に浮かび上がるのではなからうか。

註

- (1) 蕃將はこれまで「周邊異民族出身の武將」〔谷口一九七八・二頁〕、「①當時存在した國家あるいは部族（指來自當時存在的國家或部族）②周邊異民族や西域胡人（兼指邊族蕃與西域胡）③何らかの軍職に任じられている者の總稱（包括有任何一種軍銜者）」〔章一九八六・三五頁〕、「漢人以外の民族出身の唐の將校（漢人之外的其他民族出身的唐朝將領）」〔馬二〇一一・五頁〕、「異民族出身で將軍等の唐の軍事職に就官した者の總稱」〔石見一九九八c・五一七頁〕のように定義づけられてきた。唐に歸屬する武將かどうかという點が嚴密でない章群氏を含めても、およその共通の認識があるといつてよい。ただし、これらの定義では、唐以前（北周・隋）から内地に居住し、唐から

武官職を與えられている異民族姓の者が「蕃將」の範疇に入るのかという點や、「土」と「將」との區別が不明瞭であることから、本稿ではこれらを踏まえ、あらためて「非漢族出身で、唐の建國以後に歸屬し、將軍等の高位武官職に就任した者」と定義した。

- (2) 「ソグド系突厥」は、森部氏のほか「中田二〇〇九」においても使用される概念であるが、森部氏と中田氏ではその捉え方に大きな差異がある。中田氏はソグド系突厥を「ソグド文化を身につけた突厥人」と解釋し、オルドス夏州の北方に形成された蘭池州や六胡州などの羈縻州の住民をその代表例とするのに對して、森部氏は、ソグド系突厥を「突厥文化を身につけたソグド人」と理解し、より廣範に分布したとする。

- (3) 『通典』卷二八、職官典一〇、七九一頁。

- (4) かつて一聯の拙稿「林二〇〇一・二〇一二・二〇一三」では、左右羽林軍に「宿衛兵系統」、左右龍武軍に「親衛兵系統」という呼稱を用いていたが、發表後、羽林軍・龍武軍はいずれも皇帝の親衛軍であり、龍武軍のみを「親衛兵」と稱するのは適切ではないとの指摘を受けた。これを踏まえて以後、龍武軍は「護衛兵系統」と改める。

- (5) 『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上、五一六三頁。

- (6) 『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上、五一六三頁。

- (7) 檢校（檢校官）については「頼二〇〇六」「張二〇〇六」「杜二〇一〇」等參照。「張二〇〇六」は、武官の場合、諸軍衛の郎將（正五品上）以上、諸軍府の下府折衝都尉（正

五品下）・上府果毅都尉（從五品下）以上が檢校の範圍であるとする。類するものとして員外官がある。

- (8) 兵募については「菊池一九五六」參照。また蕃兵の行軍形態については「孫一九九五」に詳しい。蕃兵が行軍に参加する場合、兵募と部落兵の二種類があり、部落兵は、部落の組織をそのまま行軍の下部組織として組み入れる形態を取っていた。

- (9) 『冊府元龜』卷一一七、帝王部、親征二、一二七九頁。

- (10) 『冊府元龜』卷九八五、外臣部三〇、征討四、一一四〇四頁。

- (11) 契苾何力自身の部落は、『舊唐書』卷一〇九、契苾何力傳（三二九一頁）に「太宗其の部落を甘・涼二州に置く。何力京に至り、左領軍將軍を授けらる」とあるように、甘・涼の二州に安置されていた。したがって史料傍線部の「涼州兵」とは契苾何力配下の部落兵と考えられる。通常、遠征の際には、遠征先の近くに居住する異民族部落を徵發するのが原則であるのに對して、契苾の兵と突厥の兵だけは、廣範圍の行軍に聯續して起用されており、その戦力としての重要性をうかがうことができる。

- (12) 『冊府元龜』卷三八四、將帥部四五、褒異一〇、四三三四頁。

- (13) 錄文は、昭陵博物館・張沛編『昭陵碑石』（三秦出版社、一九九三年）二一五頁參照。氣賀澤保規編『新版唐代墓誌所在總合目錄（增訂版）』（汲古書院、二〇〇九年）の目錄番號は№%。以下、墓誌に附す四桁の番號はすべて同日

録の番號である。

- (14) 『舊唐書』卷一九四下、突厥傳下、五一八七頁。
- (15) 『資治通鑑』卷一九九、太宗貞觀二十三年八月條、六二六九頁。
- (16) 『舊唐書』卷一〇九、李多祚傳、三二九六頁。
- (17) 『舊唐書』卷一〇九、黑齒常之傳、三二九五頁。
- (18) 『唐六典』卷三、尙書戶部、七七頁。『唐令拾遺』卷二三賦役令第七條（武德七年令・開元七年令）、六七三頁には「輕稅」の二文字がないが、『唐令拾遺補』では補われている（七六八頁）。「孫一九九五」は、出征は内附した異民族の義務であったとする。
- (19) 『天聖令』は、天一閣博物館・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證』（中華書局、二〇〇六年）参照。
- (20) 『舊唐書』卷七三、薛元超傳、二五九〇頁。
- (21) 『文苑英華』卷六九四、諫蕃官仗內射生疏、三五七八頁、『全唐文』卷一五九、薛元超、九七七頁。
- (22) 『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上、五一六八―五一六九頁。
- (23) 『舊唐書』卷一九四上、突厥傳上、五一六九頁。
- (24) 『舊唐書』卷一九六上、吐蕃傳上、五二二六頁。
- (25) 『唐會要』卷五六、省號下、左右補闕拾遺、一一三三一―一一三四頁。同意の文章は、『通典』卷二二〇、邊防典十六、五四九五―五四九八頁、『冊府元龜』卷五三二、諫諍部一〇、規諫九、六〇六四―六〇六五頁、『新唐書』卷一
- 一二、薛登傳、四一七〇―四一七二頁、『全唐文』卷二八一、薛登、一六九七頁にある。ただし『通典』『新唐書』『全唐文』は「可使歸蕃」を「不可使歸蕃」に作り、『唐會要』（上海古籍出版社版）もそれに従っているので、今はこれらに従う。
- (26) 『舊唐書』卷一九四下、突厥傳下、五一九一頁。
- (27) 『冊府元龜』卷九六五、外臣部一〇、封冊三、一一一七九頁。
- (28) 『舊唐書』卷一九九下、契丹傳、五三五二頁。
- (29) 『資治通鑑』卷二二六、玄宗天寶六載十二月條、六八八―六八八九頁。
- (30) 河西・安西・北庭・朔方・河東・范陽・平盧・隴右・劍南の九節度使と嶺南五府經略使を總稱して十節度使という。『資治通鑑』卷二二五、玄宗天寶元年正月條、六八四七―六八五一頁。天寶十節度使に關しては、『王二〇〇七・五一八―五一九頁』『森部二〇一三・三七頁』参照。
- (31) また「谷口一九七八」は、「個人武將」型の蕃將は「部族長」型より官職が低く、下士官化する傾向があるとする。
- (32) 『資治通鑑』卷二二〇、睿宗景雲元年八月條、六六五五頁。
- (33) 『新唐書』卷五〇、兵志、一三三一頁。
- (34) 從來、唐元功臣とは、高祖の太原舉兵以來の元勳（唐の元功の臣）を指すと解釋される向きが強かったが、實はそうではなく、唐隆元年（七一〇）六月に起こった、韋后一派と李隆基を中心とする皇室李氏の政争において、李

隆基の配下で政權奪取に盡力した功臣集團（「唐元の功臣」の呼稱であって、その最大勢力が、當政變で實動部隊として活躍した羽林軍萬騎部隊である。その年號から、唐隆功臣と稱されるべきところであるが、「隆」字の避諱によって唐元功臣と記される場合が多い「林二〇一一b」。

(35) ただし、北衛兵の中に蕃兵が含まれた可能性については、先行研究の指摘がある。「伊瀬一九六七a」は、『舊唐書』卷一〇六、王毛仲傳の「初太宗貞觀中、擢官戶蕃口中少年驍勇者百人……謂之百騎」という記述によって、武則天期から玄宗開元年間にかけて百騎・千騎・萬騎（護衛兵系統）の中核をなしたのは、異民族系の子弟であったとする。また「蒙二〇〇五」「平田二〇一四」も、同列傳を根據に、護衛兵系統にかねてより「官戶蕃口」「戸奴」などの賤民身分の者たちが参加していたとし、同様の可能性を示唆している。しかし、これら護衛兵系統に綿々と「官戶蕃口」が用いられたことを示す史料は、まさに「官戶蕃口」の出自を持つ王毛仲の列傳のみであり、また、管見の限りでは、護衛兵系統内での組織立った蕃兵の運用も確認されないた

め、護衛兵系統への蕃兵流入の可能性そのものは否定しえないにしても、これのみで、護衛兵系統の中核が蕃兵であったと判斷するのは難しい。護衛兵系統と蕃兵の關係については、本稿の「蕃將と皇帝との紐帶を示す場としての北衛」という主旨とはまた別の問題であり、稿を改めて論じることにはしたい。

(36) 『新唐書』卷二五上、逆臣傳上、六四二二頁。

(37) 錄文は、周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編續集』（上海古籍出版社、二〇〇一年）開元〇五六、四五二―四五三頁參照。墓誌についての考察は「石見一九九八b」參照。

(38) この墓誌は、周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編』下卷（上海古籍出版社、一九九二年）、開元五二四（陝西金石志）卷一二より採録、一五一六―一五一七頁と同編『唐代墓誌彙編續集』開元一八一（『隋唐五代墓誌彙編』江蘇山東卷第一冊より採録、五七七―五七八頁の雙方に錄文がある。ここでは『隋唐五代墓誌彙編』に據った。

(39) 『舊唐書』卷九七、郭元振傳、三〇四五頁。

文獻目録（再録の場合は再録の頁數を記載）

【漢籍版本】

『舊唐書』／『新唐書』／『資治通鑑』／『通典』／『唐六典』＝中華書局標點本。

『唐會要』＝上海古籍出版社。『冊府元龜』＝鳳凰出版社校訂本。

『文苑英華』中華書局影印本。『全唐文』山西教育出版社。

【和文】（五十音順）

伊瀬仙太郎 一九六四 「塞外系内徙民と漢人との接觸交流について——特に唐代を中心として——」（一）『東京學藝大學研究報告』

一六、九一二頁。

伊瀬仙太郎 一九六五 「塞外系内徙民と漢人との接觸交流について——特に唐代を中心として——」（二）『東京學藝大學研究報告』

一七、一七一二頁。

伊瀬仙太郎 一九六六 「塞外系内徙民と漢人との接觸交流について——特に唐代を中心として——」（三）『東京學藝大學紀要』一八、

九八一〇七頁。

伊瀬仙太郎 一九六七 a 「唐代における異民族系内徙民の起用について」『山崎宏先生退官記念東洋史論集』同記念會、五一—六一頁。

伊瀬仙太郎 一九六七 b 「塞外系内徙民に對する唐朝の基本的態度」『歴史教育』一五・五・六、一八—二五頁。

伊瀬仙太郎 一九七九 「周邊諸民族の中國内徙について」『内陸アジア史論集』二、國書刊行會、三一—四七頁。

石見清裕 一九九八 a 「唐の突厥遺民に對する措置」『唐の北方問題と國際秩序』汲古書院、一〇九—一四七頁（初出…一九八七）。

石見清裕 一九九八 b 「開元十二年「阿史那毗伽特勤墓誌」『唐の北方問題と國際秩序』汲古書院、二二六—二八〇頁（初出…一九九

一）。

石見清裕 一九九八 c 「唐代外國貿易・在留外國人をめぐる諸問題」『唐の北方問題と國際秩序』汲古書院、五〇—一五三四頁（初出…

一九九七）。

菊池英夫 一九五六 「唐代兵募の性格と名稱とについて」『史淵』六七・六八、七五—九八頁。

菊池英夫 一九七〇 「府兵制度の展開」『岩波講座世界歴史（舊版）』五、岩波書店、四〇七—四三九頁。

谷口哲也 一九七八 「唐代前半期の蕃將」『史朋』九、一—二四頁。

中田裕子 二〇〇九 「唐代六胡州におけるソグド系突厥」『東洋史苑』七二、三三—六六頁。

林 美希 二〇一 a 「唐代前期宮廷政變をめぐる北衛の動向」『史觀』一六四、四七—六四頁。

林 美希 二〇一 b 「唐・左右龍武軍の盛衰——唐元功臣とその後の禁軍——」『史滴』三三、一一—一三八頁。

林 美希 二〇一二 「唐代前期における北衛禁軍の展開と宮廷政變」『史學雜誌』一二一・七、四一—六六頁。

林 美希 二〇一三 「唐前半期の閑廐體制と北衛禁軍」『東洋學報』九四・四、一一—二九頁。

- 平田陽一郎二〇一四「皇帝と奴官——唐代皇帝親衛兵組織における人的結合の側面——」『史滴』三六、五二―七八頁。
 森部 豊二〇一〇「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開」關西大學出版部。
 森部 豊二〇一三『世界史リブレット』八、安祿山。山川出版社。
 山下將司二〇一〇『唐のテュルク人蕃兵』『歴史學研究』八八、一―一頁。
 山下將司二〇一四『唐の「元和中興」におけるテュルク軍團』『東洋史研究』七二、四、一―三五頁。

【中文】（ペンイン順）

- 陳寅恪二〇〇一「論唐代之蕃將與府兵」『陳寅恪集 金明館叢稿初編』三聯書店、二九六―三二〇頁（初出…一九五七）。
 杜文玉二〇一〇「論唐代員外官與試官」『中國中古政治與社會史論稿』三秦出版社、一三―二三頁。
 賴瑞和二〇〇六「論唐代的檢校官制」『漢學研究』二四、一、一七五―二〇八頁。
 馬 馳二〇一〇『唐代蕃將（增補版）』三秦出版社（初版…一九九〇）。
 蒙 曼二〇〇五『唐代前期北衙禁軍制度研究』中央民族大學出版社。
 孫繼民一九九五『唐代行軍制度研究』天津出版社。
 王仲華二〇〇七『王仲華著作集 隋唐五代史』上、中華書局。
 張東光二〇〇六「唐代的檢校官」『晉陽學刊』二〇〇六、二、七四―七八頁。
 章 群一九八六『唐代蕃將研究』聯經出版事業公司。
 章 群一九九〇『唐代蕃將研究（續編）』聯經出版事業公司。

【附記】本稿は、平成二七年度日本學術振興會科學研究費補助金（特別研究員獎勵費）による研究成果の一部である。

The three characteristics noted above are also applicable to the family percepts of Zhen Chen. From his biography, we can find that he lived in harmony with his younger brother, and took great care of his parents. From recently found epigraph of his fourth son, we can find that he took an obedient attitude toward his mother. This means that his son inherited his nature of *xiao*. In addition, there are some historical records telling that Zhen Chen let his sons study hard, so he might have emphasized the importance of studying in his percepts.

NON-CHINESE GENERALS IN THE EARLY TANG : THEIR TRANSITION AND THE RELATION TO THE NORTHERN COMMAND SYSTEM

HAYASHI Miki

Through the early Tang period, the characteristics of non-Chinese generals (*fanjiang* 蕃將) differed during the following three periods. In the first period, from the Taizong 太宗 era to that of Gaozong 高宗 when tribes immigrated to the territory of the Tang dynasty due to the collapse of the first Turkic Khaganate, most *fanjiang* led their people and controlled them as chieftains. The second period, from the reign of Empress Wu 武則天 to the early part of the Xuanzong 玄宗 era, corresponds to that extending from the rise of the second Turkic Khaganate to the death of Mochuo 默啜. During this period, the number of Turkic *fanjiang* decreased in inverse proportion to the increase of *fanjiang* from the Korean Peninsula. In the third period, the latter part of the Xuanzong era, two new types of *fanjiang* appeared: one— Military Commissioners (*Jiedushi* 節度使) who controlled their troops widely on the frontier, and two— token generals who were the head of other ethnic groups and received titles conferred by the Tang dynasty in order to facilitate their tributary relationships.

In the earliest years of the Tang, the title of general of the Southern Command (*Nanya* 南衙) held by *fanjiang* only indicated their bureaucratic position and remuneration, while the title of Northern Command (*Beiya* 北衙) played a pivotal role in forming a close personal relationship between the Tang Emperor and the *fanjiang*. The early *Beiya* can be divided into two regiments according to their roles: the Garrison and the Imperial Guard. Although the Guards were little more than a small select group within the *Zuoyou Yulinjun* 左右羽林軍 in the beginning,

they developed over time into the Hundred Cavaliers (*Baiqi* 百騎), then the Thousand Cavaliers (*Qianqi* 千騎), the Left and Right Myriad Cavaliers (*Zuoyou Wanqi* 左右萬騎), and finally were elevated to the status of *Zuoyou Longwujun* 左右龍武軍. The military strength of the Garrison and the Guards was completely reversed by the end of the early Tang period.

On the other hand, the Garrison, *Yulinjun*, which had been the larger sized regiments of the *Beiya*, gradually declined in reaction to the rapid rise of the Guards. Almost all of the *fanjiang* in the *Beiya* held posts in the Garrison, not in the Guards, therefore, the more the Garrison declined, the more the *fanjiang* lost their connection with the emperor. The transition of the *fanjiang*'s characteristics was inextricably linked as a result of this.

In the beginning, the *Beiya* was a system to ensure the lord-vassal relationship between *fanjiang* and the emperor, but it also functioned to concentrate the forces of frontier tribal troops in the imperial court. However, the *fanjiang* were not able to maintain their connection with the Tang political center due to external factors such as the shifting circumstances surrounding the *fanjiang* in line with changes in the international situation, and the internal factor of the decline of the military power of the *Yulinjun* who could no longer provide centripetal force. The central authority of the Tang court to centralize military forces thus collapsed. Consequently, the *fanjiang* began to command forces and tribal troops on the frontier as Military Commissioners, and they took full control of such regional armies. These circumstances can be considered one reason for the occurrence of the An-Shi Rebellion.

THE DILEMMA CAUSED BY THE EUROPEAN WAR AND THE PROMOTION OF SCIENCE : NEWS REPORTS OF WORLD WAR I IN CHINA AND THEIR IMPACT UPON INTELLECTUALS

ONODERA Shiro

In 1914 when World War I began, many newspapers and magazines in China reported on the war, and one of their keywords was “science”. Du Yaquan 杜亞泉, who had argued that science was necessary to modernize China, covered the Western sciences and technologies mobilized for military purposes in his magazine *Dongfang Zazhi* 東方雜誌 (*The Eastern Miscellany*) and advocated military